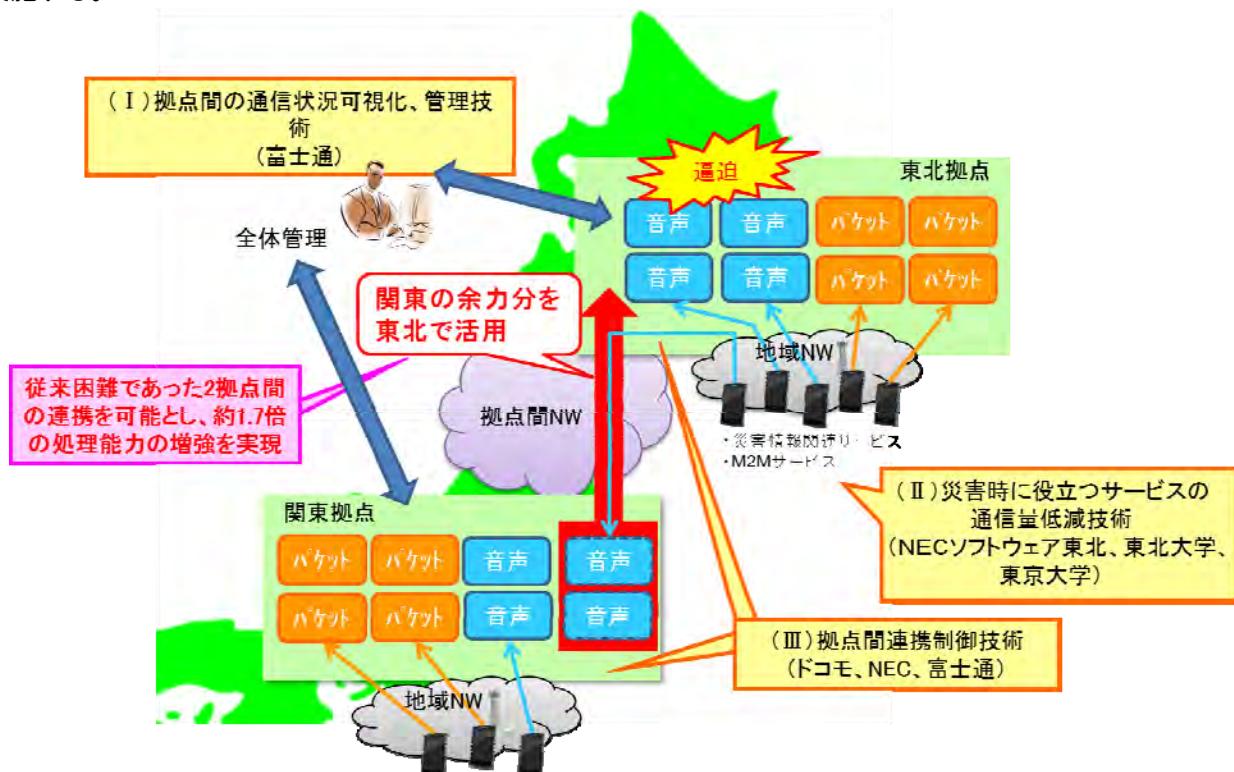


## 実証実験の構成と各社・各大学の役割

本実証実験では、従来困難であった離れた拠点間の通信能力の連携を実現し、通信混雑を迅速に緩和する技術及び災害時に役立つアプリケーション等の利用により発生する通信量を軽減する技術について検証を実施する。



企業名・大学名	役割
ドコモ(III)	・実証実験の全体アーキテクチャの検討および実証実験の運営
NEC(III)	・拠点間ネットワークの通信品質を考慮した上で、離れた拠点の通信設備を効率的に活用し、混雑している拠点の通信処理を離れた拠点で行うための連携制御技術の研究 ・上記を実現するための、SDN等によるネットワーク仮想化技術を活用した、拠点間のネットワーク連携制御技術の研究
富士通(I、III)	・仮想ネットワークに組み込まれた通信設備のシステム構成、混雑状況、通信処理能力の過不足状況等の変化を迅速に把握し、運用する可視化技術の研究(I) ・離れた拠点の通信設備を連携させる仮想ネットワークを一元的に管理し、通信処理能力の増強に必要となる時間を短縮する研究(III)
NECソフトウェア東北 東北大(II)	・大規模災害時を想定した通信混雑状態においても、平常時と変わらず利用可能な災害時に役立つサービスの通信量を低減する技術の研究
東京大(II)	・地震規模を測定するモニターシステムなど、大規模災害時に役立つM2Mサービス※1を災害後の通信混雑下において効果的に利用する技術の研究

※1 M2M(Machine to Machine)サービスとは、機械と機械が通信ネットワークを介して互いに情報をやり取りすることにより、自律的に高度な制御や動作を行う機器間通信サービス。